

「脱成長」と技術革新

朝日新聞 1月7日「気候危機と人類の今後」と題した対×談が示唆に富む。脱成長を提案する斎藤幸平さんが、「知の巨人」と評されるジェレミー・リフキンさんと、人類が生きる道をリモート形式で語り合った。表題を中心に抜粋して紹介する。

斎藤 「進歩の時代」は資本主義が発展した時期と重なります。経済成長を追い求める人類が地球を変えるほどの力を持ったという意味で「人新世」という言葉もありますが、「人新世」の複合危機は「進歩の時代」の帰結であるとも言えます。

私は、この危機を乗り越えるには、資本主義からの脱却が必要だと考えています。それでマルクスを研究しているのですが、実は晩年のマルクスは、非西欧社会に目を向けながら人間の活動と環境を調和させる方法を考えていて、「脱成長」の考え方に親和的になっていきます。それはレジリエンスの発想と通じあうものですが、脱成長と脱資本主義の必要性についてどう考えていますか。

リフキン ここは少し意見が異なるようですね。歴史的に大きな転換が起きた時には共通点がありました。①情報伝達的手段、②エネルギー源、③移手段と伝流、④水の管理方法の4分野で、新たな技術が出現していたのです。第1次産業革命ではそれぞれ、蒸気印刷と電報、石炭、蒸気機関車、近代水道の発明です。20世紀の第2次産業革命では電話・ラジオ・テレビ、安価な石油、自動車・船舶・飛行機、水力発電です。

そして現在、私たちは第3次産業革命の始まりを目にしています。高性能のスマートフォン、太陽光や風力による再生可能エネルギー、自動運転で走る電気自動車、センサーによる監視で遠隔修理も可能な上下水道のシステム。デジタル技術が駆動する新たなインフラのもと、社会は根本的に変わっていきます。「レジリエンスの時代」への移行に必要な準備はもう整っているのです。

斎藤 技術革新に期待しているわけですね。

リフキン 個人レベルで発電・蓄電をして管理できるようになり、3Dプリンターによる簡単で安価なものづくりが世界中に広がります。もちろん、効率化ではなく適応力が価値の中心となることが前提です。

斎藤 そうした未来の技術論は、私には楽観的すぎるように聞こえます。経済成長にブレーキをかけ、資本主義から距離を置かないと、この危機は解決しないと思います。

リフキン もちろんあなたの言う「脱成長」は重要な問題提起です。ただ、私は自然をお手本にして「脱成長」の先のステージを考えたい。自然は生産性ではなく、再生力、



効率ではなく適応によって成り立っている。問題は成長の有無というより、人類がこの自然とともに栄えることができるかどうかです。人類が地球を壊さずに他の生物と一緒に生きる道を考えているのです。

斎藤 人間が自然に合わせて共存を図るのは大賛成です。

リフキン 科学技術について特に若い人たちが懐疑的なのは理解できます。自分たちを破滅させる技術を手に行っているわけですから。けれども技術を用意深く使って、役立てることはできるはずですよ。

斎藤 しかし、第3次産業革命によるさらなる技術革新という夢は「進歩の時代」の名残りに思えます。加速的なデジタル技術の進歩と、自然との調和は可能なのか。身体や自然からの断絶は深まり、メタバースのようなバーチャルな世界に閉じこもる「人新世」の極地が到来するだけかもしれません。

(2024年2月11日)